OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	見えない死、隠される生
Author(s)	鷲田, 清一
Citation	臨床哲学. 1999, 1, p. 74-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10335
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

見えない死、隠される生
〈いのち〉への視点

鷲田清一

1

〈死〉は新聞に充満している。

〈死〉が報道されない日はない。災害、事故、戦争、暴行、自殺……。さまざまな〈死〉がそこにはある。が、それらはもちろん〈死〉の一部である。これらの〈死〉のまわりに、あるいは背後に、報道されない無数の死がある。病死とよばれたり、自然死とよばれたりする〈死〉が。

社会面では、有名人物やその関係者の死亡記事が小さく載せられる。しかしその死亡記事は、〈死〉の記述というよりは駅の伝言板のようなものである。葬儀という、〈生〉の側の事情のためにそれは書かれているのであって、だれかの〈死〉はここでは連絡事項でしかない。

社会的に大きな意味のある出来事や事件を取り上げ知らせるのが新聞報道の役割である以上、災害という自然の暴力、戦争という社会の暴力、たんなる不注意ではないある社会的原因をもつ事故、犯罪としての殺戮行為、有名人の死亡、少年による殺人という社会的影響の大きな事件といったものが紙面に載り、言ってみれば「ふつうの死」というものが紙面に場所をもたないというのは、たしかにあたりまえのことに思える。

昨今では、これらのほかに、脳死や臓器移植、安楽死や人工中絶などといった生命倫理にかかかわる記事が、あたらしい〈死〉の問題としてしばしば紙面の特集記事となるケースが増えている。生命倫理とはいえ、じっさいには医療現場のなかで、医療テクノロジーが提起している問題群であって、そこで問題になるのはだれかの死ではなく、臓器だとか遺伝子レベルの物質体としての人体の機能停止としての〈死〉である。科学的な〈死〉であって、だれかある知人が、家族が、死者としてこの世界から退場していくこととしての〈死〉という出来事が、そこで問題になっているのではさらさらない。

要するに、「ふつうの死」は新聞ではほとんど問題とならない。家庭欄・生活欄で、最近死亡率の高くなった病気についてや、あるいはホスピス・ケアのこと、あるいは葬式のような死の習俗のあたらしい流行について、記事がよく書かれるくらいであろう。

何が言いたいかというと、〈死〉は新聞において、それこそシステマティックに覆い隠されているのではないかということなのである。それは新聞のせいではない。そうではなくて、わたしたちの社会は〈死〉という出来事を、出来事としては一貫して視野から外している。それをジャーナリズムはさらに徹底してシステマティックに視野から外しているのではないか、その点で社会の「常識」と深い共犯関係をむすんでいるのではないか、ということなのである。

2

〈死〉が隠されているとはどういうことか。たとえば、わたしたちのほとんどが、家族のメンバーが死んでゆくその過程をぜんぶは知らない。わたしたちはそのほとんどが病院で死亡するが、死の瞬間というものはまず、心電図とか、ピッコ、ピッコという冷酷に鳴るあの枕元の器械によって、そしてそれを読む医療機関の専門家によって知らされる。器械は理論を背負っており、それを専門家は解読するのであって、死はじかに人体において知覚されるものではなくなっている。そして死亡後は、死体はわたしたちの眼のとどかない場所に移動させられ、清浄処理される。人体のだらしなく空いた孔という孔から体液が漏れだしているのだろうと、想像がつかないわけではないが、それを想像する間もなく、白布に包まれた死体に面接することになる。遺体である。死体処理の過程をつぶさに見たひとなど、この社会では医療と看護の専門従事者くらいしかいないのではないだろうか。ある講演会でそのことを申し上げたら、二十代から七十代のひとまでおよそ百人中、だれかの死体が処理される場所に居合わせたひとはひとりもおられなかった。

〈死〉という、人間の一生において決定的な意味をもつ出来事が、この社会では知覚不可能なものになっている。家で死ぬひとはめったにいないし、路上で死ぬひともめったにいない。今日でははひとはほとんど病院のベッドで死ぬ（考えてみれば、野垂れ死にするひとのめったにいない社会、指一本、手一本道に落ちていないという社会は、ふつう考えられているのとは反対の意味で、異様な社会なのかもしれない）。老衰という、しぜんに消え入るように死ぬこともほとんどなくなって、死期が近づけばなんらかのかたちで治療がなされる。治療は医療機関でなされる。坂口安吾の「カンゾー先生」が最近映画化されたが、カンゾー先生のようにひたすら往診に走る医師のすがたなど、もう見ることはない。「畳の上で死ぬ」ということばは、ほとんど死語になっている。

3

〈死〉がこのように当人や関係者のイニシアティヴの及ばないところで「処理」される出来事になっているということ、このことと関連して、病もまた、じぶんの身体に起こることであるにもかかわらず、その理解や処置はわたしたちの手から遠ざけられている。いまじぶんの身体に何が起こっているかということを、わたしたちはまるでお託宣をうかがうように医師から聞かされ、受け入れるだけ。じぶんがじぶんの身体にかかわる回路に医師という他人が介在しているわけだ。じぶんの身体をじぶんのものだと、わたしたちは自信をもっていえなくなっている。たとえばわたしの義理の祖母は、虫歯のときはどういう葉っぱを噛みしめればいいか、風邪のときはどういう草を煎じて呑めば効くか、子どものころから家族に教わってよく知っており、九十を過ぎるまでは一度も医師にかかったことはない。そういう自己治療、あるいは相互治療の習慣は、もう遠いむかしの話になっている。

さらに遡って、出産の場面。死亡と同じで、ひとの誕生も、家で産婆さんに取り上げてもらうということがなくなった。わたしたちは、家で母親のうめき声を聴くことも、赤子の噴きだすような泣き声も聴くこともなくなった。ひとの誕生がどういう事態なのかをじかに知覚することはめったにない。

念を押すようであるが、さらにもう一つ事例を加えれば、生命活動にとってもっとも重大な意味をもつ栄養摂取の前提となる調理の過程と排泄物処理の過程、これもシステマティックにわたしたちの眼から遠ざけられている。

排泄物の処理から言えば、かつて排泄が野外や共同便所でなされ、汲み取りもわたしたちの面前でなされていたのに、下水道の完備とともに排泄物処理が見えない過程になった。次に、食品はスーパーやコンビニに行くとすでに加工され調理されて、あとはチンするか湯で温めるだけでいいレトルト食品のかたちで売っている。肉や魚などの食材はきれいに切りそろえられてパックに入れて売られており、わざわざじぶんで生き物を殺し、捌く要はなくなっている。排泄物の処理も、水に流されたあとどういう経路でどこでどう処理されるのか。わたしたちの想像力はうまく働かない。

要するにわたしたちの社会では、生きるうえでもっとも基本的な出来事がもっとも見えにくい仕組みになっている。食材となる生き物の死体処理、食材の輸入調達、女性の出産、ひとの死と屍体の処理などの場面が視野から外されている。で、調理された肉を、パックされた食材を、胎脂や血液を拭われた新生児を、死化粧をほどこされ正装した遺体をしか、わたしたちは見ないのである。

どういう作業をへて、肉や食材や新生児や遺体がいま、ここに在るのか。それを思いえ

がくには、想像力が要る。だから、そういう場面が視野から外されているというのは、そこで働いてきたはずの想像力もまた萎えさせられつつあるということである。生命というと、なにか生き物の内部にあって、生き物を生き物としている実体のように考えられることがある。まるで生命の炎とでもういべきものがあって、それがいつかふっと消えるかのように、だ。が、生活といえば他人と共同のものである。他人との関係から離れて、くらしというものは成り立たない。食べ物一つ調達するのでも、社会の大きな機構が働かなくなったら至難のことになる。その事実がいまとても見えにくくされているのである。

4

誕生や病いや死は、人間が有限でかつ無力な存在であることを思い知らされる出来事でである。おなじように調理や排泄物処理の仕事も、じぶんがほかならぬ自然の一メンバーであることが思い知らされるいとなみである。調理をするという行為は、排泄物の処理とならんで、人間がじぶんが生き物であることを思い知らされる数少ない機会だからである。そういう出来事、そういういとなみが、「戦後」という社会のなかでしだいに見えなくさせられていった。

ひとはじぶんが生きるために他の生命をくりかえし破壊しているということ。そのとき他の生命は渾身の力をふりしぼって抗うということ。ひとはその生存のために一つの作業を分けあい支えあうものであること。じぶんという存在ががまぎれもない物そのものであり、生まれもすれば壊れもする、消滅もするということ……。そういうことのからだごとの体験がことごとく削除されるとしたら、わたしたちの現実感覚、もしくは《現実性の係数》そのものが、根底から変化してしまうのではないだろうか。その変容した新たな《現実性の係数》に、わたしたちの感覚ははたして耐えうるのだろうか。

「ライフ」という英語がある。わたしたちのいう生命（いのち）を生活（くらし）と重ね合わせることで、「ライフ」という語は生命というものの社会的な性格を保っている。ひとのいのちが、他人のそれに育まれ、他人のそれと根本のところで支えあう関係にあるということ。脇の下や顎の下を洗われ、こぼした乳や漏らした便を始末してもらった経験、あるいは介護や看護で他人にからだを摩ってもらったこと、恋人と指先をからませること、性の交感、そしていのちの誕生には母親のすさまじい呻き声や、赤ちゃんの噴きだすような泣き声がともなうこと……。いのちのもっとも基礎的な場面で人はたがいのいのちを深く交えている。この交感がいのちのなかを流れているということを、「ラ

イフ」という言葉は思いださせてくれる。乳児は愛情を失ったとき、食べることへの関心をなくすことがあるという。精神の不安定と早食いとの関係は、傍目にもすぐにわかる。いのちのトラブルは他人とのつながりのトラブルであることが多い。〈生〉（ライフ）の原型は、そういう他者との繋がり方のなかにあるように思われる。ありふれた言い方になるが、〈生〉も〈死〉もその根っこからして社会的な出来事なのである。

そういう視点から一貫して〈生〉と〈死〉について考える用意がないと、〈生〉と〈死〉は、この社会のシステムとの共犯関係のなかでますます見えにくくなってゆくであろう。新聞報道は、医療テクノロジーのなかの発生する死の問題だけでなく、そういうテクノロジーをも現在の社会関係のなかに（批判的な視線を失うことなく）位置づけ、〈生〉と〈死〉が現在置かれている流動的な状況を総体としてとらえる努力を、いま必要としているのではないだろうか。

（「新聞研究」1998年12月号、日本新聞協会）